

VII. 総 括

1. 大浜遺跡からみた五島列島の古代・中世

大浜遺跡から出土した遺物は膨大な量にのぼり、遺物も古墳時代～古代のものを中心に多岐にわたることが判明した。また、遺物は縄文晩期以降に形成された沼地から出土しており、この沼からは板付II式の段階から中世にいたるまでの時期に、馬・牛、特に馬を中心とする獸骨と一緒に遺物が出土するという特異な出土状態を示した。ただし、沼の底から出土した弥生時代の配石遺構の状況から、沼の形成は弥生時代後期以降との推定をした。したがって沼に遺物が投棄されたのは、弥生時代終末から古墳時代初頭のことと思われる。出土した古代の遺物のなかでも縄文陶器、墨書き土器の出土等、古代官衙との結びつきが強い遺物もみられ、古代の五島を再考する重要な資料を提供した。表3は、壺蓋の破片、特に時期編年の決め手となる口縁部を集め、表にしたものであるが、これから6世紀後半～7世紀代と、8世紀～9世紀とにピークをもち、甕・壺類の出土が多いことが理解できる。

中世については11世紀～12世紀を主体とする遺物が出土し、福江島では本格的な中世前期の遺物

杯 蓋 229点 (76%)	壺・甕類 72点 (24%)
8～9世紀 杯蓋 140点 (61%)	6～7世紀 杯蓋 89点 (39%)

表6 須恵器個体別出土頻度

が出土した。ここでは五島の古代・中世に焦点をあて、大浜遺跡と対比させながらI～V期に分類してみた（表5）。それぞれの時期について五島の歴史的背景を考慮しながら若干の考察を加えたい。

I期 3世紀後半～4世紀初頭

この時期については大浜遺跡以外に該当する遺跡はない。大浜遺跡で出土した鼓形器台については3世紀終末～4世紀前半としておさえた。鼓形器台については九州では北部九州を中心に出土しているが、これらの出土地は後に前方後円墳や官衙等につながる中心的な遺跡が多く、このことからも大浜の地が重要な位置にあったことが推測される。この鼓形器台の時期に先行する遺跡として、福江市一本木遺跡・橋遺跡等が知られている。一本木遺跡・橋遺跡の出土遺物から、これらの遺跡は西新式の前半に、大浜遺跡の鼓形器台については西新式の後半に位置づけが可能かと思われる。また大浜遺跡出土の土師器の鉢についても柳田編年（柳田1987）のIIa～b式に位置づけられるものと考えられ、大浜遺跡出土の鼓形器台と鉢は、ほぼ同じ時期に沼に投棄、あるいは配置された可能性を指摘しておきたい。沼内の遺物の中でこの時期にあたる遺物は他に看取されないことから、祭祀的意味合いが非常に強いと考えられる。鼓形器台そのものが祭祀的な性格を内包する以上、この地で沼を介した何らかの祭祀がおこなわれたことが推測される。鼓形器台という特殊な土器での祭祀であるだけに、そこには大和政権との繋がりが強い勢力が関与しているとみることもでき、在地の有力者、あるいは大和政権の息の掛かった西北九州の勢力による祭祀がおこなわれたの

であろう。ただ、祭祀遺跡と考えた場合、祭祀遺跡とする根拠が鼓形器台の出土だけであり、他の祭祀遺跡に見られるような特殊祭器を共伴しないことは今後さらに検討を要する必要がある。鼓形器台の搬入経路としては、弥生時代からの土器の搬入経路と同様に、玄界灘ルートで西北九州からもたらされたと考えるのが妥当であると思われる。これに関わったのが北部九州を中心とする海人集団の存在であろうことが予想されるが、現在のところ、この時期に関わる資料として大浜遺跡の鼓形器台と鉢以外なく、祭祀遺跡についての検討や、鼓形器台の県下でのさらなる出土を待つてこの時期を再考する必要がある。

II期 5世紀～6世紀初頭

5～6世紀の時期は小値賀島において活発な交流がしめされている。すなわち神ノ崎遺跡の調査における初期須恵器・鉄斧・陶質土器等の出土であり、朝鮮半島・北九州との交流を示す物や、南九州系の地下式板石積石室墓が出土したことなどである（塚原1984）。地下式板石積石室墓は、『肥前国風土記』の値賀郷の条にある、容貌が隼人に似ているという文面に結びつけられ、南九州との交流を示唆するものとされる。この様な活発な交流活動は在地の首長層により統制された五島海人集団の存在を示すものであり、対馬と同様に耕作地に恵まれない五島の状況を表しているものであろう。また、いまだ国家の統制の枠外にあった奔放な五島列島の姿を表していると思われる。なお、初期須恵器などの遺物は現状では小値賀島以外出土しておらず、この時期の五島列島における小値賀島の優位性をあらわしていると考えることもできる。

III期 6世紀後半～7世紀後半

この時期は小値賀島において高塚墳が形成される時期であり、小田の言うところの「国際的緊張関係における大和政権の支配強化」の時期である（小田1984）。大浜遺跡もその遺物量からみて、首長を中心とした村落が形成され、小値賀島を中心とする首長間連合の一員として機能していたことも想定されるが、現在のところ小値賀島以外では高塚墳の存在は確認されておらず、この時期の墳墓の調査もなされていない。あるいは対馬と同様に、弥生時代以来の墓制の伝統を継承している可能性もある。また、この時期は遣唐使派遣の初期のころにあたり、遣唐使の進路からは外れるが何らかの影響はあったものと思われる。この時期には小値賀島・宇久島で遺跡が散見されるようになる。宇久島宮ノ首遺跡では6世紀末のアワビの貝塚が検出されており、調査者の宮崎は萌芽的な貢納体制（宮崎1991, 1995）のなかに組み込まれていった状況を示すものとして扱っている。また馬の骨の出土から、牧の存在の可能性も推定している。

IV期 8世紀～9世紀

律令国家の出現と、遣唐使船が南路をとることによって、ますます五島列島の存在が重要になってくる時期である。五島も律令国家体制の中に組み込まれ、松浦郡五郷のうちの値賀郷として編成されている（池邊1981）。遣唐使との関わりについては、第十四次遣唐使船（宝亀七年、776年）の寄港地として合蚕田浦・川原の浦・美弥良久の埼の地名がみられ、それぞれ現在の上五島町相河、岐宿町川原、三井楽町に比定されている。以後遣唐使廃止の時期までその寄港地として五島の

		大 浜 遺 跡	五 島 の 遺 跡
期	年		
I 期	4c		
	5c		
II 期			
	6c		
III 期	7c		
	8c		
IV 期	9c		
	10c		
	11c		
V 期	12c		

表7 大浜遺跡編年表

各地が文献上に登場するが（木本1996）、寄港地としては五島列島の西海岸が主体であり、東海岸における寄港地名はほとんど皆無である。この時期は大浜遺跡の遺物量が最大になる時期であり、緑釉陶器・墨書き土器などの他、壺・甕・壺等を出土する時期である。緑釉陶器の出土や墨書き土器の出土は官衙、あるいは寺社等の存在を想定させるが、大浜に関する文献等は現在のところ存在しない。また大浜遺跡は福江島の南海岸にあたり、先述したように遣唐使の寄港地が五島列島の西海岸に集中することと相違するのである。

『日本三代実録』卷十によれば、貞觀十八年（876年）在原行平の建議により庇羅・値嘉郷を合わせて上近・下近の二郡とし、値嘉嶋を設置するという条項が記載されていることから、他と同様に嶋司・郡領を設置したとされる。木本は庇羅郷を上近郡とし、値嘉郷を下近郡に推定している（木本1996）。先の建議が実施されたとするならば、五島に嶋司あるいは郡家が存在したことは間違いない。大浜遺跡の遺物が畿内産緑釉陶器や墨書き土器を出土する背景にはこのような事象とも関連してくるのである。また、畿内産緑釉陶器、墨書き土器の出土は、大宰府との結びつきが非常に強くなった状況を示すものであろう。律令体制の一端に組み込まれた五島ではあるが、894年には遣唐使の派遣が中止され、以後中央の文献上に登場しなくなる。大浜の遺物をみても10世紀前後に一旦希薄になる。

さて、大浜遺跡では今回の調査により多数の骨を検出した。年代測定の結果ほぼ7世紀～8世紀の年代を得ている。これはⅢ期後半から～Ⅳ期にあたる年代である。

この時期に大浜周辺に牧が存在した可能性大であり、大浜遺跡がこれらの牧の管理施設としての機能をもった場所であることが考えられよう。

V期 11世紀～12世紀

10世紀代については、文献あるいは遺物ともに資料的にほとんど知られていないが、東アジアに目をむけると、中国では唐の滅亡、五代十国を経て宋が建国され、朝鮮半島では新羅が滅び高麗が建国されるなど激動の時代である。一方日本では律令体制が崩壊し、各地に荘園が形成される時期で、地方豪族が力をもってくる時期である。この時期に福江島でどのような勢力が台頭してきたかについては次のV期を研究する上で非常に重要なところとなる。ここでは一応空白の時期ということでV期を11～12世紀として捉えようと思う。

11～12世紀代になると五島列島が、にわかに文献・遺物ともに検出されるようになる。この時期は博多を中心に住蓄貿易が展開される時期でもあり、西北九州各地で爆発的に貿易陶磁が出土する時期である（亀井1992）。12世紀代の五島に関する文献は、12世紀中葉に小値賀島が松浦氏の支配下にあったことや、小値賀島地頭職の清原是包の存在など、小値賀島をめぐる領有権についての記載から始まり、以後『青方文書』を中心に史料の展開がなされる。IV期では中央の文献に登場する五島が、この時期にはほとんど扱われず、一地方文献に現れてくることは、10世紀の地方豪族の台頭を考える上でも重要な事象であろう。

以上、大浜遺跡を中心に五島列島の古墳時代から古代に到るまでⅠ期～Ⅴ期に分類したが、未だこの時期の調査数は少なく、現在ではまだ充実したものとはいえない。特に福江島を主体とした調査が望まれ、古墳時代・古代の五島列島を知る上で、ひいては九州西北部の島嶼文化を知る上で、特に重要な地といえよう。

【引用・参考文献】

- 柳田康雄 1987「土師器の編年2九州」『古墳時代』6 土師器と須恵器 雄山閣
 亀井明徳 1992「唐代陶磁貿易の展開と商人」『アジアのなかの日本史』Ⅲ海上の道 東京大学出版会
 池邊彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館
 小田富士雄 1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集 小値賀町教育委員会
 宮崎貴夫 1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第2集
 宮崎貴夫 1995「五島列島の弥生古墳時代の墓制と文化」『風土記の考古学』5

2. 年表からみた、古代・中世における五島列島

68～73ページに五島列島に関する年表を提示した。大浜遺跡に関する事項等を文献から拾うことを目的として作成したが、直接大浜に関連する事項を見いだすことはできなかったため、福江島という範囲で捉えてみることとする。福江島に関する項目は、信憑性の高いものとしては遣唐使に関する記事である。遣唐使の寄港地については、上五島、下五島（通常、五島列島のなかでも奈留島以南を下五島、若松島以北を上五島とする）ともにそれぞれ現在地に比定がなされており、とくに最後の寄港地としての三井楽は当時の中央にも聞こえた土地である。9世紀の五島は遣唐使の最後の寄港地として、重要な役割を果たしており中央の文献上にも記載されることが多い。特に876年に奈留島の上鳴神と小値賀島の神島神社が從五位下を特に授けられたこと、また屁羅・値嘉の二郷を上近・下近の二郡とするなどの記録はこの地域が9世紀以後、中央にとっていかに重要な位置にあったかを示す事柄であろう。大浜遺跡の綠釉陶器や墨書き土器はまさにこの時期の所産であり、遺物のうえからも大浜遺跡がなんらかのかたちで関わっていたことは間違いないであろう。さて、それでは遣唐使が廃止された9世紀以降についてはどうであろうか。作成年表でみる限り10世紀から11世紀の五島列島はこの期間ほぼ空白であり、9世紀の状況からは一変する。また、12世紀以後の年表は、ほぼ「青方文書」に負うところが多く、13世紀までは青方氏を中心とする上五島の地名のみで構成され、福江島の土豪等の名前は一切登場しない。福江島が文献上に新たに登場するのは14世紀、1383年に宇久氏が岐宿に移住したことである。つまり福江島については10世紀から13世紀にいたるまで文献上空白であるということである。五島列島最大の島、福江島がほぼ400百年間文献上空白であるということは何を意味するのであろうか。もちろん文献上に登場しないことがそこに歴史が存在しないということではないのであって、福江島にはそれなりの勢力があったであろうことは、今回の大浜遺跡の12世紀を中心とする遺物からも理解できよう。ただし、大浜遺跡の出土遺物は6世紀後半から12世紀まで連綿と遺物が出土し、以後16世紀まで遺物はみられるものの、13世紀以後、遺物は極端に少なくなっていることは事実である。福江島の調査において古代・中世の遺物が量的に一括して出土したのは

今回の調査だけであり、他に比較検討の余地はないが、今後文献上空白である福江島の歴史を検討するためにも今後の福江島には一層の注意を払わなければならないものと思う。

3. まとめ

今回の調査によって判明したこと、あるいは問題点を箇条書きにし、まとめとした。

- 1, VII層から阿高式系土器・鐘崎式土器、北久根山式土器を出土し、その内容は同じ大浜地区に存在する中島遺跡と同様のものであり、石器・骨角器等からもいわゆる西北九州型漁撈文化を特徴づけるもので、島嶼部の縄文後期文化を代表するものとして捉えられよう。
- 2, V層から縄文晚期黒川式土器が出土しているが、この直上に数メートルの砂の堆積がみられ、黒川式土器以後に海退期があったことが推察される。また、砂丘上に再度生活の痕跡がみられるようになるのは板付Ⅱの段階からである。またこの時期に今回調査区の窪地に配石墓がつくられている。同志社大学調査地点をも考慮すると、砂丘上に大規模な弥生時代の墓地が形成されていたことが明らかになった。
- 3, 窪地は弥生時代、配石墓が作られた後に、水が入り込み沼地を形成した。以後古くは4世紀代の遺物や6世紀後半から12世紀までを主体に連綿と遺物が投げ込まれた状況を呈した。また、馬を主体として獸骨類の多量の出土があり、今回の年代測定の結果7世紀後半から8世紀後半の骨との結果を得た。このことにより、この地域が古代の牧である可能性を示唆することとなった。
- 4, 越州窯系青磁・綠釉陶器・墨書き土器の出土や多量の須恵器の出土から、官衙の可能性を考える必要性があり、古代の大浜地区を歴史的に再考する必要性がある。また印花文陶器の出土は、この当時の朝鮮半島との交流をも考えさせるものであった。
- 5, 遺物から10世紀前後の遺物が一旦希薄となり、11世紀から12世紀に舶載陶磁器を主体とする遺物が出土するが、このことはあるいは律令体制の枠から脱却した在地土豪への勢力転換の時期を示す可能性を持つものと考える。

中国産陶器 (1 %)				
白 磁	青 磁	明 染	高麗 青磁	朝鮮製 雜釉陶
(48 %)	(15 %)	(8 %)	(7 %)	(21 %)
輸入陶磁器			国産土器 (土師質土器・瓦器・石鍋)	
145点 (31 %)			324点 (69 %)	
中国産陶器 (1 %)				
土師質土器 (67 %)			黒A (5%)	黒B (8%)
碗 53点 (79 %)	皿30点 (15 %)	杯 16点 (6 %)	碗 10点 (100%)	瓦器碗 (100%)
			碗	石鍋
				(10 %)

丸底杯5点

表6 陶磁器の系統別出土割合